

改造社版『大魯迅全集』の成立

——内山完造宛魯迅書簡および鹿地亘自宅宛書簡を軸にして——

呂 慧 君

はじめに

二〇二三年四月二日から九日までの間、「魯迅重要文献展」が上海内山書店旧址にある「1927・魯迅与内山紀念書局」において開催された。今回公開された資料は鹿地亘が二十世紀三十年代に大分県の両親に送った書簡および写真である。鹿地の自宅宛書簡は全部六通で、短い葉書もあるが、二枚に及ぶ長い手紙もある。鹿地の本名は瀬口貢で、書簡の宛先は「大分県西国東郡三浦村（字）堅来」に居る父親の瀬口真喜郎と母親の春子である。送り先は鹿地夫妻の上海居住地である「上海寶樂安路燕山別墅35号」と記しているので、従来 of 学界ではその住所を「34号」と間違えたことを是正した。手紙は一九三六年五月九日から一九三七年四月二十二日まで、つまり鹿地が初めて上海に行き、魯迅と知り合って四か月過ぎた時から魯迅が逝去した後、鹿地夫婦が上海に残っていたまでの時期である。その中、一九三六年十月二十二日の手紙に、魯迅が内山完造に送った自筆の書簡も同封されている。

本論において、以上の書簡を解読することによって、鹿地亘等の文人が魯迅との関係を事実検証と文学思想の両面

から掘り下げ、『大魯迅全集』の成立に至るまでの事情を説明することを試みる。

一 内山完造宛魯迅書簡

鹿地亘の一連の書簡から、まず注目すべきものは、一九三六年十月二十二日の手紙に同封された、魯迅が内山完造に送った自筆の書簡である。この書簡は従来のあらゆる魯迅の全集や手稿全集に収録されていない、新たに発見された魯迅の書簡である。その内容を以下のように引用する。

老版…

「写真之類」ハ割合に訳シニクイ文章デスガ、シカモヨク訳サレテ居マス。無論誤訳モ處々ニアルケレドモ。鹿地亘様ニミセタイカガデスカ？同文ヲ訳スルトキニ（若シ鹿地亘様モ訳スナラ）参考ニモナルガラウカラ。

Ｌ拜

八月廿八日

従来の魯迅の手稿から、魯迅が日文を書く際、カタカタと漢字を混ぜて使用する習慣が見える。それだけでなく、筆跡はもちろん、この書簡にある内山完造に対する「老版」（あるいは「老板」という中国式の呼び方と「Ｌ拜」という署名も従来の手稿と完全に一致している。手紙には、年が記されていないが、鹿地亘が一九三六年一月に上海に逃亡し、二月に内山完造の紹介で魯迅と知り合ったことから推測できるが、同封の鹿地の手紙の末尾に「魯迅の、私について、『内山』氏に当てた手紙、一つおくりませう」という一言が付いていることから、それは一九三六年の書簡に間違いないと判断できる。

魯迅が「写真之類」という訳文を読んだ後、すぐ内山完造経由で、鹿地亘に渡すのを頼んだということから、魯迅が左翼青年である鹿地に対する配慮と信頼が見える。この書簡は以上のような情報を提供したほか、いくらかの疑問ももたらしてきた。まず、「写真之類」は魯迅のどの作品なのか、その作品はどの訳者によってどの雑誌に翻訳されたのか。次に、もし訳文が存在する場合、魯迅が言った「誤訳」はいくらあるのか、そしてどのように間違ったのか。最後、鹿地は同文を翻訳されたことがあるのか。翻訳された場合、前の訳文と比べて、両者の翻訳スタイルに異同があるのか。以上の謎が解けたら、魯迅生前の作品が日本における翻訳の空白を埋めるほか、二人の訳者が魯迅との文学関係研究を広げることも期待できる。鹿地は改造社版『大魯迅全集』の訳者なので、『大魯迅全集』の成立にも繋がっていると考える。

二 書簡内容の検証——小田嶽夫と魯迅

手紙より前の時期にある日本の雑誌を調査したら、「写真之類」という作品は、一九三六年八月に『文筆』という雑誌に載せた「写真の類」であることが判明した。これは魯迅の「論照相之類」が日本における初めての紹介である。これを糸口に日本に現存する十九冊の『文筆』を確認した結果、ほかにも魯迅の作品が見つかった。

- ① 「写真の類」(小田嶽夫訳、『文筆』第一巻第一号、一九三六年八月)
- ② 「小雑感」(小田嶽夫訳、『文筆』第一巻第二号、一九三六年九月)
- ③ 「文人無文」(小田嶽夫訳、『文筆』第一巻第三号、一九三六年十月)

以上の三篇はそれぞれ魯迅の「論照相之類」⁽¹⁾、「小雑感」⁽²⁾及び「文人無文」⁽³⁾の訳作で、みな芥川賞作家小田嶽夫による日本初の翻訳・紹介である。

小田嶽夫は『魯迅伝』（一九四一年）によって名を挙げているが、実は魯迅と一回面会したこともない。彼は一九二四年から一九二八年まで杭州日本領事館で外務省書記生として派遣された後、いったん日本に戻り、一九三七年三月にまた上海に一か月ぐらい旅行した経験がある。彼は鹿地夫婦の紹介で許広平女史を訪ね、胡風、簫軍、簫紅などの作家と会ったことがある。魯迅との面会が実現できなかったが、小田嶽夫は早くも一九三六年から魯迅の作品翻訳に力を入れ、鹿地亘と『大魯迅全集』第七巻を共訳し、日本の雑誌においても魯迅を語ったことがある。

小田嶽夫は一九三六年四月の「魯迅と翻訳」に、魯迅作品の日本語訳として、当時には主に井上紅梅訳改造社版『魯迅全集』、佐藤春夫、増田涉共訳岩波文庫版『魯迅選集』、増田涉訳サイレン社版『中国小説史』があり、「他に隨筆選集が拙訳で近々砂子屋書房から出ることになつてゐる」⁽⁴⁾と述べている。『文筆』一九三六年九月号の「後記」にも、来月は「小田嶽夫氏訳『魯迅隨筆』が出る」と記しているが、十月号の「後記」には以下のように記述している。

小田嶽夫氏は芥川賞によつて有名であり、従つて「魯迅隨筆」も早く上梓すべきであるのを遅延し、砂子屋書房はあまりに商売気が無さすぎるとの非難を受けてゐる。尤なも非難ゆゑせいぜい急ぐことにしませう。

訳者本人にしても、出版社のほうにしても、発行予定の『魯迅隨筆』を相当重視していたと見えるが、残念なことに、この本に関する情報は今だに見つかっていない。小田嶽夫は魯迅の理解を得るために、上海内山書店へ手紙を送ったこともある。

僕は魯迅氏とは面接もなく、最近ほんのちよつとした交渉があつただけである。といふのは近々僕が同氏のエッセイ集の小冊を某書肆から上梓することになつてゐるので、そのことにつき諒解を求める手紙を送つた。アドレスが分らないので、上海の内山書店氣付にして送つたのだが、しばらくすると内山書店主内山完造氏から手紙が来た。それによるとさつそく手紙は魯迅先生に届けたが、先生は病気で寝てゐられ、代つて返事を出すやうに頼まれたがエッセイ訳集の上梓といふことについては彼是言ふ氣はないが、やはり近々日本の某書肆から同系のものが出ることになつてゐて、その訳稿を一々自分が校訂してゐるやうな関係もあり、諒解といふ点になると貴意に副ひ兼ねるといふ先生の御氣持だといふのである。

ところが僕の方としてはもう出版を中止することのできない状態に立ち至つてゐるので、重ねて手紙を出すつもりにしてゐ乍らのびのびになつてゐたところへ突然のこの訃報であつた。(5)

内山完造が伝えた「同系のもの」は出版計画中の改造社版『魯迅雜感選集』であらう。魯迅が小田嶽夫に対する唯一の記載は、一九三六年九月十五日の日記にある「得小田岳夫信（小田嶽夫の書信を得）」(6)という一言である。小田の追憶は、この手紙の内容も提示してくれた。

小田嶽夫が上述の三篇を翻訳した理由について、以下の引用から少し窺える。小田は「魯迅——主としてその諷刺性について」で、「重々しく暗い」、「憂愁的」、「痛烈」、「深刻」などの言葉を用いて魯迅の雑文にある諷刺性を形容しながら、以下のように指摘している。

若も彼の諷刺の対象が単に自国の為政者若くは権力者だけに限られてゐて済んだなら、彼は今よりはるかに明るい面貌で僕等に映つてゐたであらう。だが彼の場合その対象は、彼と類を同じくする知識階級、文人に及び、一般支那民衆にまで拡まつてゐる。つまり、全同胞、支那的なるものが、彼には諷刺の対象物とならざるを得ないのである。そして、その彼自身は何人であるか、まさしく一個の支那人である。ここに彼の諷刺の特殊性がひそむ。(7)

小田嶽夫が翻訳された三篇の作品は皆社会現実に対する強い諷刺の意味を持つ文章である。特に魯迅は「論照相之類」において、当時中国の民衆の持つ封建的かつ保守的な思想、そしてある種の病的な心理、変わった芸術審美、権力崇拜などの社会問題に対して、痛烈に諷刺したのである。小田の認識は、彼が上述の作品を翻訳する理由を説明するにはヒントを与えた。

また、掲載媒体の『文筆』という文学雑誌であるが、この雑誌は日中両国においてあまり研究されていないのが現状でありながら、雑誌の編集者と出版元にしても、登載作品の質にしても、日本近代文学研究、日中比較文学などの分野において看過できない雑誌だと言えよう。

雑誌の編集長である山崎剛平は和歌詩人、出版人であり、二十世紀二十年代から多数の文芸雑誌を相次いで出版し、一九三五年に『文筆』の出版元でもある砂子屋書房を創立した。砂子屋書房は文学作品を大量に出版し、例えば、太宰治の『晩年』（一九三六年）、尾崎一雄の『暢氣眼鏡・尾崎一雄第一小説集』（一九三七年）、伊藤整の『芸術の思想』（一九三八年）、小田嶽夫の『泥河』（一九四〇年）などが挙げられる。ちなみに『泥河』には小田の「漂泊の魯迅」も収録される。砂子屋書房はすでに八十年余りの歴史を保っているが、現在は依然として出版業界で活躍し、和歌や詩集を主として、小説と文芸評論集も発行している。特に格調のある装丁と大胆な表紙デザインにおいて、好評を博している。

『文筆』の前身は山崎剛平が編集を担当する『文芸雑誌』である。一九三六年一月から五月まで発行し、その後廃刊し、八月に『文筆』が発行された。今確認できる範囲の現物から判断できるのは、『文筆』は少なくとも一九四一年六月まで続いた。

山崎剛平は「後記」に「月刊雑誌『文筆』を創刊いたしました。真面目に文筆にたづさはる人たちの作品の発表機

関としたく、誌名もそこから思ひつきました。同時に一方では当書房の月報をも兼ねさせて頂きます」と記述した後、『文筆』が『文芸雑誌』の代わりに同人が文学に対する理想を実現してほしいと表明している。

『文筆』は毎号特定のテーマを設け、近々砂子屋書房によって出版される新書を紹介する。創刊号には「写真の類」以外、太宰治の「晩年」自賛と中村地平、山岸外史が短編集『晩年』に対する推薦文などが掲載している。そのうえ、掲載の作品は小説・評論・随筆以外に、和歌と外国文学の翻訳が特徴であろう。魯迅の作品の連続紹介のみならず、フランス作家ネール・ドフの「飢多と貧困の日日」等の翻訳も、日本で初めての紹介になっている。「かかる珠玉の如き小篇が個々読切りで連続してゆくことは、読書子の幸福である。奥村氏の名訳と共に本誌の自慢とするところ。御期待を乞ふ」と「後記」に語られている⁽⁸⁾。

三 小田嶽夫の誤訳と鹿地亘の訳文

一方、鹿地亘も同じ作品を翻訳した事実は『大魯迅全集』から確認できる。魯迅が手紙を書いた時、改造社が『魯迅雑感選集』の出版を計画していた。その前に、瞿秋白編集の『魯迅雑感選集』⁽⁹⁾が存在し、「論照相之類」がその中に収録されているが、魯迅は改造社版の選集が中国語版の撰篇を参照するかどうかは知らないから、「若シ鹿地亘様モ訳スナラ」、参考になれるという考え方を持っていたのである。結局、思いもよらないことに、魯迅の急な逝去によって、改造社は選集の出版計画をいっそ世界初の『大魯迅全集』に変えた。後には詳しく紹介するが、鹿地は第二卷から第五卷、そして、第七卷の翻訳を担当した。「論照相之類」は「写真などを論ず」と題され、第三卷に収録されている。小田嶽夫の訳文と対照したら、魯迅の言った「誤訳」の箇所が見つかるほか、両者の異同も明らかに見えた。

「論照相之類」をもとに、鹿地亘の訳文と比較し、小田嶽夫の訳文は「ヨク訳サレテ居マス」が、やはり間違つて訳する所、或いは抜けている所が十四箇所見つかつたが、以下の表にまとめる。

まず、表1から、言葉の面における小田嶽夫の誤訳が分かる。例えば、中国語の「用意」という言葉は意図、狙いなどの意味であるが、小田はそのまま訳したが、実は日本語の意味と異なっている。そして、小田は「然而只要一看那些繼起的模仿者們的擬天女照相」という一文にある逆接を表す言葉「然而」を、並列関係の接続詞「そして」に翻訳する箇所も、鹿地亘ほど中国語を完全に理解していなかつたようである。

次に、翻訳の方略を見ると、小田嶽夫は「異質化」の方法を取つたのに対して、鹿地亘は完全に「受容化」に属する¹⁰⁾。すなわち、小田は中国語の漢字をそのまま保留する傾向が多く、鹿地はこのような言葉を日本の語彙、日本人が理解しやすい言葉に翻訳する特徴がある。例えば、鹿地は「洋鬼子」、「鯽魚」、「鉄線」、「麻姑」のような専門用語

表1 誤訳対照一覧表

魯迅		鹿地亘	
小康	小樂	世間並みに暮らしてゐる	
徒令	徒に	徒に	
用意	用意	目的	
左中堂	在中堂	左中堂	
帽架	帽子	帽子掛け	
花盆	花瓶	植木鉢	
看穿	衝いた	見抜いた	
永久	遅い	生命は長い	
然而	そして	然し	
框子里的照片	写真	額縁の中の写真	
因為像腰斬		やうだ	
然而名士風流又何代蔑有呢		しかも	
死心塌地、俯首貼耳	屈服	眼をつぶつて、首も耳も垂れる	
倘若白昼明燭		もし白昼明燭をつけ	

あるいは中国の文化背景のもとで生じた言葉を、「毛唐」、「鮎」、「針金」、「仙女」のように翻訳したわけである。その中、「毛唐」は日本人が外国人に対する差別用語で、中国語の「洋鬼子」とは意味的にも感情的にも一致している。小田訳は「洋鬼子」に対して注釈を付けたが、他の言葉に対しては、特に説明していなかった。

最後に、両者の翻訳スタイルの面から見れば、『大魯迅全集』第三卷に鹿地訳「小雑感」も収録されたので、それを小田訳と対照しながら、小田訳が話し言葉に近いのに対して、鹿地訳は書き言葉を多数使う特徴が見える。

この書簡が鹿地亘の両親宛の手紙に同封されたことは、鹿地が魯迅の書簡を読んだことが確実で、小田巖夫の訳文も参考にしたと考えられる。そして、魯迅が手紙と小田の訳文を内山完造に渡す際に、「写真の類」という一文を修正、添削したことがある可能性が高いと思うが、残念ながら、その訳文の原物はまだ姿が現れていない。上海に行く前に中国語学習歴のない鹿地の翻訳の水準が割合に高いことは、魯迅、胡風、日高清磨瑤⁽¹⁾などの支えのおかげだと考えられる。内山完造の記憶で、「魯迅先生から直接教へを受けた人は、日本人の中では私の知つてゐる限りでは増田さんと鹿地さんだけであると思ふ」⁽²⁾。魯迅が亡くなった二日前、自ら鹿地の住所である「燕山別墅」に行つて、彼が翻訳中生じた疑問に解答するためであった。鹿地は『中国小説史略』や『阿Q正伝』、「上海文芸の一瞥」などの著書或いは作品を多数翻訳した中国文学研究者増田渉に次いで、上海で幸い魯迅と知り合いになって、魯迅の教示を得て、魯迅の人格魅力、文学思想及び闘争精神に魅せられて、奮闘する力を得たのであろう。

四 鹿地亘の翻訳及び魯迅の「情熱」

上述の魯迅の内山完造宛書簡から、魯迅が鹿地亘という文学青年に対する温かい心遣いが読み取れる。鹿地は一九三六年七月十一日に母親の瀬口春子に送った手紙で、魯迅の文章の翻訳に言及したことがある。「魯迅先生の本を送

りたいが、送っても、白話文は、現代語がよめないと、まるでよめませんから、私の訳が出てから送ります」。その時、鹿地は恐らく改造社版『魯迅雜感選集』の事業に携わっていたので、「私の訳」はそれを指す可能性もあり、他の訳作を指す可能性もある。

今までの学界では、鹿地亘の中国における反戦運動の研究ほど、彼の翻訳活動、特に魯迅作品の翻訳に関する研究はそれほどなされていなかった。調べた結果、一九三六年の一年間だけにおいて、鹿地の訳作が日本の雑誌に何篇も載っている。年代順に以下の七篇が挙げられる。

- ① 「阿金」〔『文芸』第四卷第五号、一九三六年五月一日〕
 - ② 「春末閑談」〔『文学評論』第三卷第七号、一九三六年七月一日〕
 - ③ 「私の第一の師父」〔『日本評論』第十一卷第七号、一九三六年七月一日、日高清麿瑛と共訳〕
 - ④ 「諷刺詩三篇——散文詩集『野草』より」〔『改造』第十八卷第九号、一九三六年九月一日〕
 - ⑤ 「忘却の記念のために」〔『文学案内』第二卷第九号、一九三六年九月一日〕
 - ⑥ 「深夜に誌す」〔『改造』第十八卷第十二号、一九三六年十二月一日〕
 - ⑦ 「中国文学運動に於ける統一戦線の問題」〔『文芸』第四卷第十二号、一九三六年十二月一日、日高清麿瑛と共訳〕
- 「春末閑談」掲載の『文学評論』にある「編輯後記」には、「魯迅氏の隨筆は上海にゐる鹿地亘氏が翻訳し、直接魯迅氏の校閲を経たものである。現在の時局を諷刺した好読物である」と評価されている。この以前に出版された『魯迅選集』（佐藤春夫、増田渉訳）は小説と講演文で、『中国小説史』（増田渉訳）は學術著作を翻訳した単行本であったが、鹿地亘の訳文から諷刺性の強い二十年代の散文（詩）と戦力のある三十年代の雜文を選び取る傾向が見えるほか、魯迅の文学思想に対する独自の認識が読み取れる。

鹿地亘は「春末閑談」（一九二五年四月二十四日作）の文末に「春末。僕は魯迅の隨筆集『墳』をよみながら、魯氏の夢にも又獨特の情熱があることを發見し、非常に興味深く覺えた」と嘆いている。それから、「諷刺詩三篇——散文詩集『野草』より」について、鹿地亘は『大魯迅全集』第二卷の『野草』解題に以下のように指摘している。

全篇を貫く一つの沈鬱な暗い思想がある。人々は（殊に魯迅を語る日本の文人學士は）好んでこれを「東洋の虚無」といひ、魯迅に結晶された東洋文化の特質の一つであるかのやうに言ふ。だが魯迅の暗さには、彼が極力蔑棄して来たところの「東洋の虚無」の思想的停滯はない。暗さと共に全篇を一貫して泌み出てるものは、進歩への激しい情熱である。暗黒の古き中国の中から民族革命家として出発した魯迅の仕事の基調をなすものはこの激情だ。

鹿地亘はまた「魯迅さんは中国の現情に、日常の談話でも、深い絶望をもつてゐた。不思議だな。あの絶望の中で、ところが確乎とした希望を失つたことはなかつた。」¹⁴と内山完造の言葉を引用した。

「東洋の虚無」の代表と言われる『野草』は、正に魯迅の「激情」と「絶望感」を複雑に入り交じつた散文集である。特に「聡明な人と馬鹿と奴僕」の一文は、学者竹内好の目には、絶望かつ抵抗のある魯迅が映っていて、「絶望は、道のない道を行く抵抗においてあらわれ、抵抗は絶望の行動化としてあらわれる。それは状態としてみれば絶望であり、運動としてみれば抵抗である」¹⁵と説明している。しかし、鹿地亘が感受したのは、魯迅特有の「情熱」である。一九三七年三月五日に解題を落筆した時に、すでに魯迅のこの熱情と激情をはっきり認識したのである。この「情熱」は竹内好の「抵抗」とは同じく絶望感、暗さ、苦悶、虚無などから生じたものであるが、「抵抗」よりポジティブなエネルギーが感じ取れる。この精神は鹿地を文学の道と反戦の道に導いた灯りでありながら、魯迅自身及び他の文学者が闘争しながら、絶えず前進する原動力でもある。

三十年代の雑文を翻訳するのは、鹿地亘が魯迅の雑文に現れた徹底的な批判精神、抗弁精神への追隨が反映できる。「忘却のための記念」と「深夜に誌す」は共に国民党当局が革命者、木刻青年に施した暴行に対する憤慨を示した作品である。『文学案内』の編集者である貴司山治は、「魯迅氏は中国のジイド以上の存在ですが、ずっと文学案内を見てくれてゐます。今度送つてくれた『忘却の記念のために』は僕らが旧作家同盟の『文学新聞』をやつてゐた頃、逸早く報道したことのある中国左聯作家五人の蒋介石政府による××の思ひ出です。これを読んで僕らは思ひ再び新たなものあり」⁽⁵⁾と記している。

そのほか、「中国文学運動に於ける統一戦線の問題」は唯一『大魯迅全集』に収録されていない雑文であり、「答徐懋庸并関于抗日統一戦線問題」が改題されて訳されたものである。鹿地亘は訳文の初頭に前書きを添え、徐懋庸その人および「国防文学」と「民族革命戦争の大衆文学」の論争に導いた背景を紹介したのが日本の読者にとって必要である。両方のスローガンは国家と民族、政府と大衆の区別を強調する傾向があるが、魯迅は「問題はスローガンではなく実際の仕事にあることを警告し、両スローガンが相矛盾するものでないこと」を表明している。鹿地はその指摘に大いに賛同し、魯迅から贈ってもらった『海上述林』の話題から、魯迅の言動に感心したことを中国の青年たちに向かつて以下のように話したことがある。

この本を見たまへ。こゝには中国新文化の開拓者の仕事がある。彼は実りの少い、論争に暇をつぶすよりも、文化の啓示となる実際の必要な事業を、翻訳であれ紹介であれ、黙々とやつてゐる。このやうな仕事は力不足の、結末もない論争の繰り返しに代りに諸雑誌の内容を埋めるやうに、すべての人々が努力したなら、「聯合」は自から成立して来るだらう。仕事の不足などころには何時でも感情や瑣末の衝突が絶えないものだ。口舌の論争も宜しい。だが基本的な方向で一致したなら、瑣末な言葉の問題に拘泥せず、いづれの側の人々も早く仕事を充実することに努力すべきである。

魯迅の仕事もそれであつた。病中彼は休むことなしに、「版画集」を出版し、「海上述林」を編輯した。それは魯迅以外の誰もがやらなかつたことで、「誰もしないことだから私がしよう」と魯迅は言つてゐたといふ。¹⁰⁾

鹿地亘の訳作を掲載した雑誌は、ほとんど魯迅と鹿地の主張した左翼文学理念と一致し、魯迅との関わりも深い。例えば、『改造』には魯迅の日本語で書いた文章が載っているほか、魯迅と社長の山本実彦は内山完造を經由して上海で面会した後、魯迅の推薦でもあり、山本の希望でもあり、一九三六年六月から一九三七年一月から、全六篇の中国新進作家の作品が『改造』に載せられ、その訳者はまさに鹿地亘と日高清磨瑳である。それに限らず、両者は瞿秋白の「魯迅雜感選集序言」¹¹⁾を共訳し、「中国革命と魯迅」という題で『日本評論』に寄せたこともある。鹿地は一九三六年五月二十六日に父親の瀬口真喜郎に送つた葉書には「改造六月号から、小生の翻訳が出はじめました。もう御迷惑はかけません。もし貧乏なさつたら、こつちでは、金が余りさうです」と伝えている。『改造』の翻訳により、鹿地は経済的苦境から抜け出したのである。後章で引用する一九三七年四月二十二日の書簡から、鹿地がまた『大魯迅全集』の翻訳により、生活状況が大幅に改善していた事実も分かる。『改造』以外に、魯迅は改造社の『文芸』にも関心を持つていた。また、『文学評論』に関して、魯迅はソ連の児童文学作家パンテレーエフの童話「金時計」を翻訳する時、創刊号にある藤森成吉の文章を参考にした経験があり¹²⁾、さらに、同誌一九三四年四月号の立野信之の「ゴーゴリ私観」を翻訳したこともある¹³⁾。

一九二〇年代から、魯迅の「孔乙己」、「故郷」、「阿Q正伝」などの小説が続々と日本語に翻訳され、主に中国で発行した日本語雑誌や新聞に載せられた。三十年代になると、『改造』掲載の魯迅の日本語作品以外に、日本の文学雑誌、総合雑誌に翻訳された作品はそれほど注目されていない。上述した小田嶽夫及び鹿地亘の訳作は魯迅作品の日本

における同時代紹介、魯迅の文学思想及び当時中国の文壇と政情が日本における広がりにおいて、重要な役割を果たしたと考える。特に鹿地の魯迅及び中国青年作家の翻訳活動に関する発見は、魯迅文学ひいては中国近代文学の日記研究にとって欠かせない一環であると言えよう。

五 鹿地亘自宅宛書簡における魯迅

鹿地亘が中国における翻訳などの仕事はほとんど魯迅を中心に展開したわけ、書簡には至る所に魯迅の姿が見える。例えば、一九三六年五月二十六日の葉書には、「魯氏は、私が日本の出版物に最近書いた「魯氏」のことなぞよんで、大変喜んであります。時に、散歩に、立ちよってください。大変仲よしです」と書いている。二人は知り合って、四か月ぐらいいしか経ってないにも関わらず、仲良くなつたうえ、鹿地は自分を認められた魯迅の喜びに誇りを持っていた。「最近書いた」文章というのは、一九三六年五月に『文芸』に掲載された「魯迅と語る」であろう。文末の記載によると、完成は二月十九日であった。鹿地がその年に日本の雑誌に寄せた魯迅と関連のある文章は他にも「上海通信(二)——魯迅と中国文化運動の今日——」^④、前述の「魯迅と私」及び池田幸子の「最後の日の魯迅」^⑤が見られる。

その一連の書簡で一番重要なのは、一九三六年十月二十二日の一通である。鹿地亘は魯迅の棺に付き添う十二名の人中、唯一の日本人である。前述したように、魯迅は逝去の二日前、燕山別墅35号である鹿地夫婦の住所に行つて、風邪を引いたので、病状が悪化したのである。鹿地亘が両親に師匠であった魯迅を失つた悲しみを伝えたのである。

御父上様

御母上様

師友を失つて、悲しみの中にゐます。

死の二日前、突然、魯迅は私の家に訪ねてくれました。私たちは狂喜して、一時間余り、さまざまの話しをしました。風の吹く、急に冷えて来た日で、魯迅は私たちの見送りを拒んで、ひとりて風の中に出て往きました。

今もそのさまが見えるやうです。その夜、急に重態に陥り、翌日は、数回、御見舞ひしましたが、二日目の朝、使の者が来て、駆けつけた時にはもう間に合ひませんでした。

二十二日は埋葬で、私は仕事をやめて、葬儀の中にゐます。

御父さんからの御依頼の揮毫のこと、もうそろそろ丈夫になられたので、御願ひしやうと思つてゐる矢先き、果さないうちにかういふことになりました。今はもう、病中、私に下さった二三の手紙と、私の訳稿を訂正して下さいました。きちやうめんな細字とが、肉筆での僅かな記念となりました。私と魯迅先生とは、国境を越えて、他の誰よりも親しく、一しよに活動まで見に往つてゐましたのに。魯迅氏から貰つた本は山ほどあります。

十日前、魯迅は、突然、中国の版画展覧會場に姿を現し、青年画家たちが喜んで、氏をとりまいて写真を撮りました。

中国の芸術家たちは皆私を知つてゐますので、画家たちが、私にその写真を送つてくれました。

実はその前日、私もその展覧會に招待されて行き、一しよに写真をとりました。記念のために、魯迅先生の写真と一しよに三葉、お送りします。

今は葬送のために慌しい中にゐますので、とりあへず、悲しいお知らせだけ致します。お母様に宜しく。

ただ私については御心配なく。むしろ、私の地位は今、この国では、文学者たちが、魯迅に代つて、たよりにしてゐるさまですから。あまりたよりにもならない、貧弱なたよりですが。

魯迅夫人に、弔文を送つて下さい。

一人息子の八つになる海嬰といふ悪坊主が、うちから送つて下さった、えびの餅をかかえて、葬儀場をはねかへつてゐま

す。骨の細い子供なので、親父が多分、明治何十年代かの医学によって、カルシウムを食はせるやうに、おやつにくれてやったものでせう。

又送ってあげて下さい。

匆々

十月二十二日、埋葬の日に。

鹿地亘

魯迅の、私について、「内山」氏に当てた手紙、一つおくります。

私あてのものは、雑誌に発表されてからにします。

二人の最後の対面は多数の文献で記載されているが、鹿地亘の言葉によって、改めて読者をその現場に連れていくように感じる。書簡から、魯迅は鹿地の両親と親しい関係を保っていたことも読み取れる。「御父さんからの御依頼の揮毫」という件は、一九三六年五月二十六日の書簡に記した「魯氏に、筆せきをもらふやう話しておきました」ということである。父親の瀬口真喜郎は漢学者で、息子を頼んで魯迅の筆跡を求めたが、残念なことに実現できなかった。

この手紙といっしょに送った「魯迅先生の写真」とは、魯迅が第二回全国木刻流動展覧会で中国の青年版画家と一緒に撮った写真であり、魯迅生前の最後の写真となっている。他の二枚の写真は鹿地夫婦が同じ展覧会で青年版画家と一緒に撮った写真と、鹿地夫婦が胡風、『上海日報』編集長後藤和夫等と寶楽安路の住所の前で撮った写真である。

実は、鹿地亘が両親に送るものは写真以外に、自分の文章、魯迅の作品及び遺物もあった。一九三六年十二月十四

日の葉書には、「コルヴィッツの版画集書留めで送ったのですが、どどきましたかしら。これは大切な、日本には中野重治氏のところの一つあるきりの本です。魯迅先生の形見ですから、とどいたかどうか、お知らせ下さい。」と書いている。魯迅は一九三五年九月に、柔石を記念すると同時に、ケーテ・コルヴィッツを声援するために、大量な精力と財力を注いで、『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』を編集したのである。一九三六年五月に、画集は上海で発行され、一〇三冊しか印刷できなくて、そのうち、三十冊が海外で販売し、四十冊が贈り物で、残りの三十三冊は上海内山書店で代理販売した。鹿地の思い出によると、八月中旬に、彼はお見舞いとともに、病中の魯迅から頂いた『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』を感謝するために魯迅の住所を訪ね、その日に魯迅から『海上述林』を頂いたほか、コルヴィッツの版画の本物を楽しんだこともある²³。その後、魯迅は九月六日に、当時計画中の『魯迅雜感選集』の撰篇について鹿地に返信したが、「ケーテ・コルヴィッツ版画選集序目」の収録やある版画の説明を訂正することから、魯迅のこの版画集に対する重視が見られる²⁴。魯迅が十月十七日に鹿地夫婦の住所に行くとき、また二冊の『ケーテ・コルヴィッツ版画選集』を他の雑誌と一緒に、日本の友人に渡そうと頼んだのである²⁵。書簡の情報を合わせて読むと、中野重治の分は鹿地巨を介して送ってもらったのであろう。魯迅は「忘却のための記念」、「深夜に誌す」「死」などの作品に皆コルヴィッツを語ったことがあり、これらの作品は鹿地夫婦に翻訳されている。コルヴィッツのプロレタリア芸術は、魯迅の紹介を通じて、当時共に左翼運動が抑圧されていた日中両国において、重要な意義を持っていたと言えよう。

そして、「私の訳稿を訂正して下さったきちょうめんな細字」は、魯迅が鹿地巨に対する細かい指導の証であろう。「魯迅先生は人のために何かする時は決して気配に見せない。秘かにわからないやうにする。あの時先生は君のためには心配してゐた。君の生活のことも考へてゐた。」という胡風の言葉を回想しながら、鹿地は魯迅と知り合いにな

ってから「まもなく、私は魯迅とU氏との援助で、改造社と結んで、中国新文学の紹介と、魯迅雜感選集の翻訳の仕事を始めただ。その稿は魯迅と胡風とが一つ一つ詳細に眼を通してくれたのだ。魯迅の心尽しの一つ一つについては書き切れぬ」と感銘を受けている。そのほか、「時々私のところには、是非読んでおく必要のある書物や雑誌がとどけられ、私の翻訳には細かく眼を通した校正の細字が返された、時には、『面白いものではないが、訳したら金にはなるでせう。』といふ優しい言葉を副へられた雑誌を送ってくれた」^四。魯迅が鹿地の翻訳事業に対する尽力によって、鹿地訳文の高い水準が成就され、『大魯迅全集』の出版にも繋がった。

また、書簡には「むしろ、私の地位は今、この国では、文学者たちが、魯迅に代って、たよりにしてゐるさまですから。」という自慢しているような言い方があるが、一九三六年七月十一日の母親である瀬口春子宛の書簡にはすでに同じような大げさな言葉が見える。「何しろ、大変有名な支那文学者になってしまいましたよ。よろこんで下さい。魯迅先生のおかげで。」鹿地亘が最初中国に上陸した頃は、「はつきりした計画はない。ただ中国と中国の文学者たちを見たかつたのだ」、「中国にとどまつて勉強をして見たい」という願望だけ持って、「魯迅と会へることは考へてもゐなかつた」^四が、ただの半年後、前述したように、魯迅や他の中国新進作家の文学を翻訳し、日本の雑誌に投稿し、『魯迅雜感選集』から『大魯迅全集』の翻訳という重任を委ねられたのが事実である。魯迅の恩を忘れず、今の業績を成就したところは、両親も慰められたのであろう。一文学者に成長した鹿地に対して、従来 of 学界では翻訳や中国文学研究の面に対する関心と評価はそれほどなされていなのが現状である。書簡に記載された鹿地の心から発した言葉を通じて、彼に対する直感的な認識を深めることができ、鹿地と魯迅に関するさらなる研究を進める可能性を広げることができると考へる。

六 『大魯迅全集』の成立に至る

鹿地亘が一九三六年十二月十四日に両親に寄せた葉書の中に、「魯迅先生が逝くなって、急になほ、仕事がいそがしくなりました。先生の全集が出版されるので、それがすむまで、二人とも、こちらにゐた方が都合がいいのです、来年の四月頃まで。」と書いてある。魯迅が急逝した後、出版計画の変更で、すでに訳作をいくつか出した訳者群にとつても、新たな挑戦になっただろう。

書簡の最後の一通は、鹿地夫婦が一九三七年四月二十二日に送った手紙で、『大魯迅全集』に関する詳細なことが語られている。

お父さま、御母さま。

写真を送りませう。それから今日、魯迅全集第三巻、つまり私の訳の一つを送りました。よんで下さい。

少し訳に悪いところがあります。それは改造社にゐる思ひよつた御用訳者が、わざわざ手を入れて、誤訳にしたからです。

それがわかつて、ひどく腹を立て、改造と縁切りしやうかと思ひましたが、散々あやまって来て、もうこんな間違ひをしないさうだから、私の仕事に小指一つ出さぬ約束をさせて、つづけることにしました。

今日、四巻を訳しました。二巻の私の訳した詩集は、二十五六日に出来て、来るでせう。送ります。

あと、随筆一卷、七百枚やつつけます、もう二百枚できてゐます。それから、書簡日記集を訳して一段落です。

三千しか刷ってないさうで、一卷につき五百円足らず、やっと、千五六百のお金しかできません。そのうち、内山さんの借金三百五十円、とは大した借金でせう。

しかし、この本は全集が出てしまへば、何度でも、単行本で出版できます、小さいながら財産です。

今月から又、改造で小説をつづけます。

それから又、ぼつぼつ自分の原稿を書きます、今までの注文を一通り片づけて。支那の雑誌に書いたものが少しありますが、うちに送っておきませうか。

今日はやっと一息。全集がすみ次第、大分で、本式に大一息です。

さようなら。

四月二十二日

頁

書簡から、『大魯迅全集』を翻訳するには、鹿地亘の予定より時間がかかったことが分かる。事実上、鹿地夫婦は第二次上海事変の後、燕山別墅を離れ、フランス租界で一時居住した後、中国各地に転々として反戦運動に身を投じた。そして、書簡から『大魯迅全集』第二巻出版の時間が確認できた。その時間は「昭和十一年四月二十日」と印刷されていたが、それは昭和十二年の誤植だと認識していたが、確かな根拠がない。「二巻の私の訳した詩集は、二十五六日に出て、来るでせう」という一言は、出版時間の昭和十二年四月を裏付けた。それにより、『大魯迅全集』の出版時間を整理すると、一九三七年二月に第一巻、三月に第三巻、四月に第二巻、五月に第四巻、六月に第七巻、七月に第六巻、八月に第五巻の順番である。

鹿地亘が手紙を送る際、すでに第四巻の翻訳を完成し、残った「隨筆一卷」は第五巻、「書簡日記集」は第七巻のことであろう。鹿地亘は第一巻（井上紅梅・松枝茂夫・山上正義・増田渉・佐藤春夫訳、小説集）と第六巻（増田渉・松枝茂夫訳、文学史研究）以外の五巻の翻訳を引き受け、『大魯迅全集』の重要な訳者になったと言えよう。その中、第二巻

は散文詩・回憶記・歴史小説で、鹿地亘・松枝茂夫・井上紅梅・増田渉・佐藤春夫の共訳である。第二巻では鹿地の『野草』解題と上述の「諷刺詩三篇——散文詩集『野草』より」が収録され、その中の二篇が改題された²⁸⁾。第三巻から第五巻は胡風の撰篇による随筆・雑感集である。その中、第三巻と第五巻は鹿地亘が独訳したもので、第四巻は鹿地亘と日高清麿の共訳である。「春末閑談」は第三巻収録、「忘却のための記念」は第四巻収録、「深夜に誌す」、「私の第一の師父」、「死」（池田幸子訳）は共に第五巻に収録されている。第七巻は書簡・日記で、魯迅の年譜と伝記が付録され、小田嶽夫と鹿地亘の共訳である。総じて見れば、鹿地夫婦が一九三六年に翻訳した魯迅の作品は、「中国文学運動に於ける統一戦線の問題」以外、全部『大魯迅全集』の前五巻に入っている。

鹿地亘が書簡で語った「支那の雑誌に書いたもの」と言えば、魯迅が逝去した直後、中国語雑誌に四篇登載したことが確認できる²⁹⁾。一九四〇年代の文章になると、今のところ三篇が見つかり、みな鹿地が一九四一年十月に魯迅逝去五周年を記念するため創作した「魯迅の魂」の中国語訳である³⁰⁾。鹿地はその文章で魯迅の人柄と思想を顧み、再び魯迅の著作を読むことで、後人に対する鞭撻を深刻に感じた。

終 わ り に

書簡は作者の感情及び作者と他者の関係を如実に反映できるテキストであろう。上述した書簡及びそれに関わる文献資料を合わせて解読する試みは、魯迅文学における「諷刺性」及び「情熱」を感じ取った小田嶽夫と鹿地亘の翻訳により、魯迅文学の生前における日本語の翻訳・紹介研究の新天地を開くことができるほか、鹿地の魯迅との親交の細部に入り、二人の文学関係を解明することができ、鹿地その人に対する認識を刷新することもできた。鹿地亘は反戦運動を積極的に行われてきた以外に、井上紅梅、山上正義、増田渉、佐藤春夫に次いで、魯迅文学の重要な翻訳

者、中国文学研究者だと評価できよう。

本稿では紙数の関係で一九三六年一年間の翻訳作品を検討したが、鹿地亘はそれ以後も日本の雑誌で魯迅関連の感想文、訳文を発表したほか、『魯迅評伝』（一九四八年）、『中国の十年』（一九四八年）などの著書を残し、魯迅の思い出及び中国での経歴を語り、一生魯迅を偲びながら、その恩情を心に銘じて、魯迅の文学思想と闘争精神を發揚しながら、輝かせていた。

註(1) 魯迅「論照相之類」〔語絲〕第九号、一九二五・一・十二。

(2) 魯迅「小雜感」〔語絲〕第一号、一九二七・十二・十七。

(3) 魯迅「文人無文」〔申報（自由談）〕、一九三三・四・四。

(4) 小田嶽夫「魯迅と翻譯」〔書物展望〕第四号、一九三六・四。

(5) 小田嶽夫「魯迅を偲ぶ」〔支那人・文化・風景〕竹村書房、一九三七・十二。

(6) 魯迅『魯迅全集』第十六卷（人民文学出版社、二〇〇五・十）。日本語訳は『大魯迅全集』第七卷によるものである。

(7) 小田嶽夫「魯迅——主としてその諷刺性について」〔支那人・文化・風景〕竹村書房、一九三七・十一。

(8) 山崎剛平「後記」〔文筆〕第二号、一九三六・九。

(9) 魯迅『魯迅雜感選集』（何凝編、青光書局、一九三三・七）。

(10) 「受容化（domestication）」と「異質化（foreignization）」は現代の翻訳研究者ヴェヌティ（Lawrence Venuti）が論ずる二つの翻訳方略である。

(11) 日高清麿はその当時『上海日報』政治部主任で、鹿地亘の高校同窓である上海同盟通信社の牧内正雄の友人であった。

(12) 内山完造「旧版跋」〔増田渉『魯迅の印象』角川書店、一九七〇・十二）。

(13) 魯迅『大魯迅全集』第二卷（鹿地亘・松枝茂夫・井上紅梅・増田渉・佐藤春夫訳、改造社、一九三七・四）。

(14) 竹内好「中国の近代と日本の近代——魯迅をてがかりとして」〔日本とアジア 竹内好評論集第三卷〕筑摩書房、一九六

- (15) 貴司山治等「編集室レポ」(『文学案内』第二卷第九号、一九三六・九・一)。
- (16) 鹿地亘「魯迅と私」(『中央公論』第五十一卷第十二号、一九三六・十二・一)。この文は一九三六年十月二十七日に書き終わり、後に『魯迅評伝』(日本民主主義文化連盟、一九四八・四)に収録。中国語版は『作家(上海)』第二卷第二号(一九三六・十一・十五)、『現代文選』第一卷第一号(一九三六・十二・一)に掲載。
- (17) 前掲『魯迅雜感選集』。「中国革命と魯迅」は序言第二節からの内容(第二頁―第二十五頁)を翻訳したものである。
- (18) 魯迅『魯迅全集』第十卷(人民文学出版社、二〇〇五・十一)。
- (19) 同上。
- (20) 鹿地亘「上海通信(その二)——魯迅氏と中国文化運動の今日——」(『文学評論』第三卷第四号、一九三六・四・一)。
- (21) 池田幸子「最後の日の魯迅」(『文芸』第四卷第十二号、一九三六・十二・一)。中国語版は『作家(上海)』第二卷第二号(一九三六・十一・十五)に掲載。
- (22) 前掲「魯迅と私」。
- (23) 魯迅『魯迅全集』第十四卷(人民文学出版社、二〇〇五・十一)。
- (24) 前掲「最後の日の魯迅」。
- (25) 前掲「魯迅と私」。
- (26) 前掲「魯迅と私」。
- (27) 手紙の末尾に池田幸子の挨拶もあるが、ここで略す。
- (28) 『大魯迅全集』に収録した題目は「失はれた好い地獄」、「聡明な人と馬鹿と奴僕」、「犬の駁詰」であり、『改造』所載の題目は「失はれた好き地獄」、「聡明な人と馬鹿と奴僕」、「犬の反駁」である。
- (29) この四篇は「魯迅和我」(『作家(上海)』第二卷第二号、一九三六・十一・十五)、「魯迅的回憶」(『訳文』第二卷第三号、一九三六・十一・十六)、「与魯迅在一起」(『光明(上海1936)』第一卷第十号、一九三六・十一・二十五)、「魯迅和我」(『現代文選』第一卷第一号(一九三六・十二・一))である。
- (30) この手稿は立命館大学国際平和ミュージアムに所蔵され、全部で十八頁あり、幾らか修正した所がある。中国語版「魯迅

魂」は欧阳凡海に翻訳され、それぞれ『文芸生活（桂林）』第二巻第四号（一九四二・六・十五）、『文芸春秋（上海1944）』第二巻第一号（一九四五・十二・十五）、『魯迅文芸月刊』第一巻第一号（一九四六・二・二十五）に掲載。

※この度は大橋先生の御退職を祝賀し、博士課程における懇切丁寧な御指導を心より感謝申し上げます。なお、本稿は中国国家社会科学基金一般項目「上海日文報刊文学資料整理与中日文学関係研究（1900-1949）」（23BWW022）、上海市哲学社会科学规划课题「徐家匯藏書樓日文献所見近代中日文学関係研究」（2022ZWX005）、教育部省国際共同研究加速基金「戦時下の北京・上海及び周辺都市における日本語出版物と文芸文化ネットワークの研究」（代表者：大橋毅彦）の助成によるものである。

（ろ けいくん・上海外国語大学日本文化経済学院副教授）